

70歳と80歳記念に山の本を書いて

三塚 正志(S30年卒)

私はS34年から北九州市に、H元年から大分市に、H20年から東京都に住んでいる。70歳記念に「大分県の低い山々」(2007、大分合同新聞社)を、80歳記念に「高齢者にも楽しめる東京近郊の尾根山歩き」(2017、創英社/三省堂書店)を書いた(写真)。

九州には20代から60代まで通算45年間住んだ。若い時には、テント・炊事用具・食料などを背負って、山を歩いた。当時有人の山小屋は祖母山のみだった。52歳からの大分では、重い荷を背負っての山歩きは厳しくなった。幸いにも、大分市は地理的に九州の山歩きに好都合である。その上、大学勤務では時間に余裕があったので、大分県とその近くの山々を随分歩いた。大分県では九重山への入山者が多いが、その他の山々への入山者は少ない。したがって、九重山以外の山々では道標が少なく、案内書に記載されている山々には

ほとんどない。これらの山に入るときには、事前に地形図で歩くルート調べておくことが前提条件である。現地で登山口を見付ければ、登山の80%は終了である。山に入ったら、実際の地形と地形図を見比べながら歩くので、一日に歩く距離は多くても10km程度である。

大分県には、県境尾根を含め約300の三角点がある。私は約240の三角点を踏んだが、その70~80%には踏み跡もなかった。山麓の集落には鎮守様があり、集落の裏山に山の神が祀られていた。春秋の祭りには、山の神の登山道が整備され集落の人々が参拝に登った。

S40年頃から人々が山麓を去るようになると、山の神の登山道の多くが放置された。登山道は3~4年整備されないと廃道になる。私が大分市に住んでいた当時、山麓の集落の多くが限界集落または無人集落になっていた。

わたしは、昔山の神が祀られていたと推測される山とその登山道を重点的に調査した。この調査結果の一部「大分県の低い山々」にまとめて出版した。

H20年に東京都に転居してから東京近郊の山や尾根を歩き始め、H30年秋までに約480回入山した(全て日帰り)。東京近郊の山歩きで気付いた主なことは、

- ① 主要な登山道に行政が設置した道標(公的道標)が多いこと、
- ② 地形図持参の登山者が非常に少ないこと、
- ③ 登山者が一日に歩く距離が長いこと、

である。①については、行政側が歩かせたい登山道(一般道路)を決めているようである。逆に、歩かせたくない登山道(一般道路からの枝道など)には、公的道標はほとんど見当たらない。分岐点に立ち入り禁止の表示をしていることもある。このようなコースには、個人

が取り付けた道標や目印はあるが、歩く人は非常に少ない。②については、一般登山道のみを歩く場合、公的道標が多いから地形図を読む必要はないようである。③については、一般登山道のみを歩く登山者は、公的道標に忠実に従えばただ歩くだけなので、一日で長い距離を歩けるようである。

私は、地形図を読みながら、一般登山道のない尾根を歩くのが好きである。東京の登山者にも私流の山歩きを体験していただきたいと思い、「**高齢者にも楽しめる東京近郊の尾根歩き**」を書いた。東京近郊の山歩きの案内書は多いが、尾根歩きのそれはすくないようである。これまでの案内書に、ほとんど掲載されていない尾根に重点をおいて書いた。

大分の本を 70 歳で出版したので、東京の本を 80 歳で出版することにした。東京では公共機関を利用しての山歩きなので、一日の調査時間が短く、調査範囲も狭かった。そもそも中佐時間が不足だった。この結果、不十分なデータで執筆することになった。85 歳記念にすれば良かったのではないかと考えている。